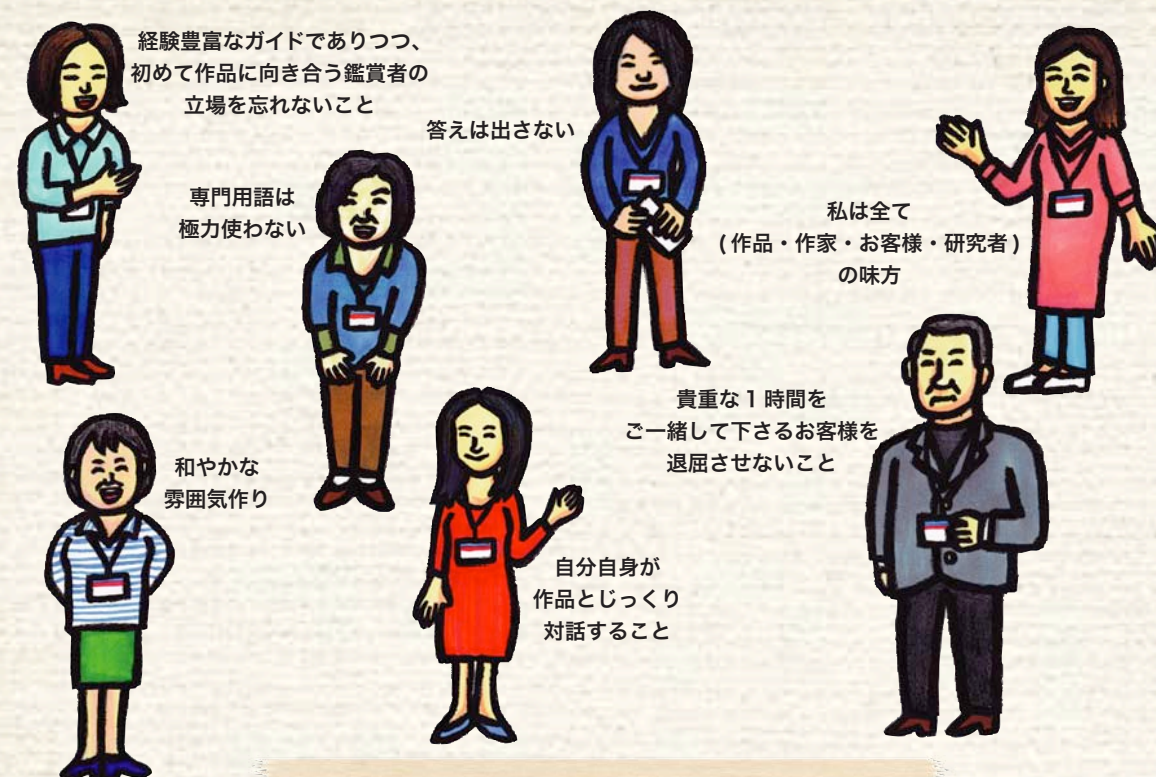
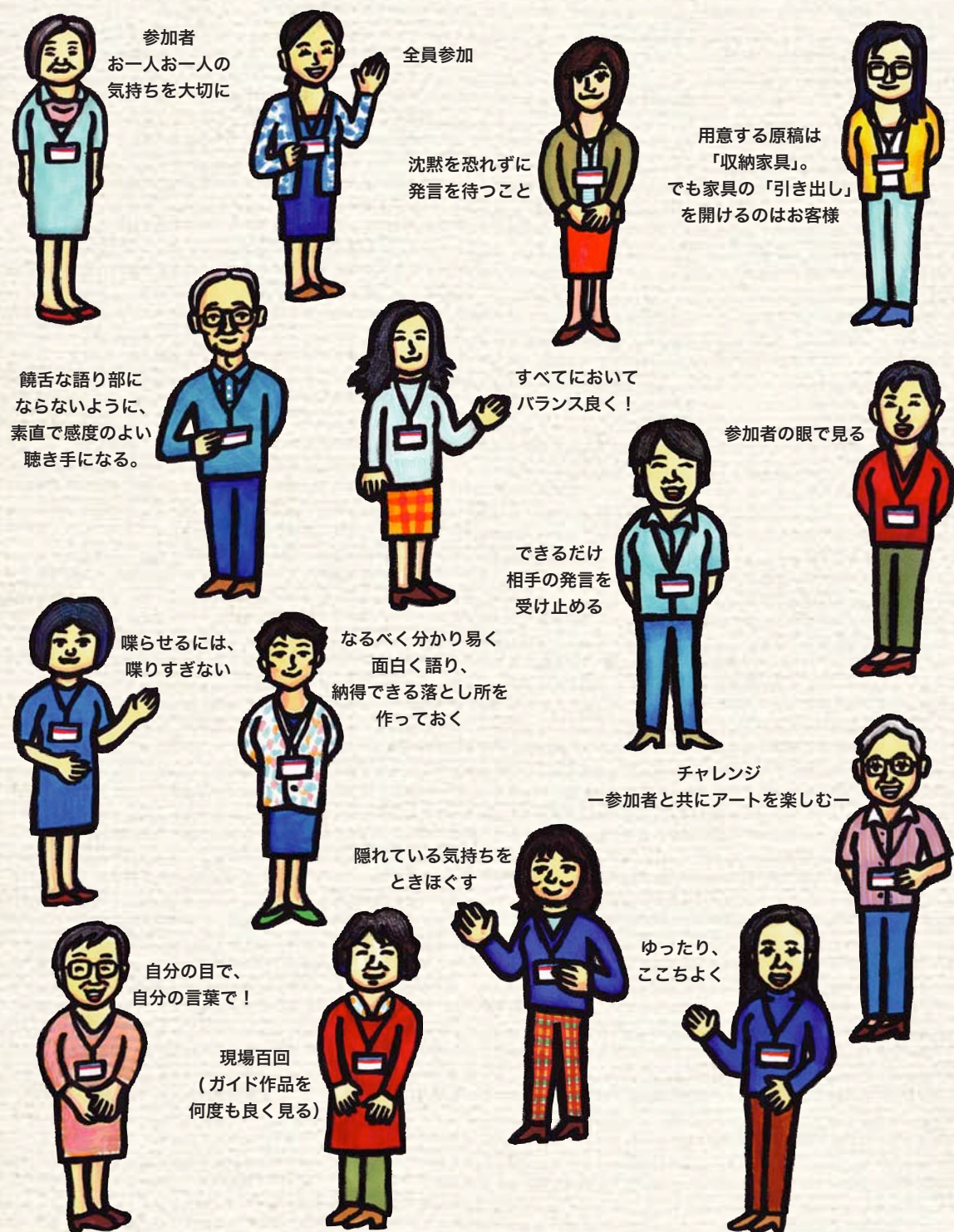


ガイドスタッフのひとこと

所蔵品ガイドで工夫していることや、心がけていることは？



ガイドスタッフをやっている良かったと思う瞬間



あなたにとって、ガイドスタッフの魅力とは？



大人とみる

ガイド経験豊富な4名のガイドスタッフに語ってもらいました



Tさん



Hさん



Kさん



Sさん

ガイドスタッフに応募した動機を教えてください。



私は既に埼玉県立近代美術館でボランティアガイドをしていました。その美術館のコレクションは東京国立近代美術館（以下 東近美）のものと近いけれど、ひとつの美術館だけだと範囲が狭まってしまうし、もっと広く深く勉強したいと思い応募しました。



会社を退職した後、大学で好きだった美術について勉強していました。卒業時に、タイミングよくボランティア募集を知りました。何か美術に携わりたいと思っていたので、エントリーしたんです。ただ、どちらかというと、現代美術に関心がありましたが、近代美術を学べば学ぶほど奥が深いことがわかり、現在に至ります。



岡山県立美術館でボランティアガイドをしていましたが、家庭の事情で東京に滞在する時間も多くなり、東京でもボランティアをしたいと思っていた時に応募しました。同じようなコレクションのある美術館であれば、新たな場所でも活動しやすいと感じました。



私も東京都現代美術館でボランティアガイドをしています。東近美のコレクションは近代から現代にかけて幅広く、しかもコンスタントに展示替えされるため、ガイドのやり甲斐を感じ、応募しました。

所蔵品ガイドは対話を重視したトークであるという特徴を持っていますが、いかがですか？



自分ひとりの世界でじっくりと作品を鑑賞することに慣れていたので、人と話をしながら鑑賞することには迷いもあり、疑問を抱きながらスタートしました。でも、養成研修で、みんなと話をしながら鑑賞した時、ひとりひとりが違う見方をしていることを知りました。それが驚きであり、新鮮でもあり、やる価値があると感じました。



「対話型」に違和感はありませんでした。参加者の言葉をうまく引き出してあげられるような問いをしたいと思っています。大人はプライドがありますが、そのプライドを傷つけずに素直な気持ちで作品と対峙させてあげたい。自然な切り口とはどのようなものか、常に考えています。話し手である私が「この作品、一見ゴミみたいですね？」とか言うことで、参加者に「そう思ってもいいんだ」というふうに感じてもらいたい。



そういう雰囲気作りは大切です。参加者が感じたままを言える雰囲気作りと、投げかけには工夫が必要です。



「対話型」は、先入観なく見ることができて面白いです。私は絵の前で聞き手に徹するようにしています。それが結果的に対話型になっているんですよ。でも、作品が良いからこそ話が展開していくんですよ。

「所蔵品ガイド」は、どのような人が参加するかわからないし、参加者の美術の知識や経験などバックグラウンドも違う。それが所蔵品ガイドの難しさだと思いますが、いかがですか？



でも、その差があるから面白いと思っています。むしろその差をうまく利用しようと考えています。鑑賞作品についてよく知っている人も、他の方がどのように感じているのか知りたいわけですし。



私たちは調停役のようなものですよ。



参加者でも作品に詳しい人、歴史に詳しい人、色々な方がいる。もっと、自分に知識があれば、参加者の意見をうまく拾えたのと思うことがあります。



話し手である私たちが、全てを知っている必要はないと思います。知っている参加者に聞くという展開もあってよいです。



聞き手を語り手にするということです。



知識は不必要なわけではなく、知識があることで深く鑑賞できることもある。また、参加者が考える材料にもらえることもある。
所蔵品ガイドをやっていて思うことは、性別年齢に関係なく参加者の方々は感性が鋭い方が多いこと。その感性をうまく受けとめないといけないと思っています。



美術の知識があるとかないとか関係なく、本質を見抜く眼を持つ人はいますよね。



それは、作品の力なのかもしれない。



作品の前で語り合うことは良い経験。ガイドが終わって「自分ひとりで来たら絶対にこんなにじっくり見ることはなかったし、ほかの人の意見を聞くことはなかったと思う」という声をよく耳にしますよね。

「所蔵品ガイド」のテーマはどのように決めていますか？



日本画作品のように、その季節にあったものを優先的に選ぶことがあります。



東近美はコレクションが豊富なので、色々なテーマで組み立てられる。参加者へのプレゼントのような気持ちで、参加者をイメージしながら選びます。企画展も意識します。



私は1度トークしたものは、2度は取りあげないように心がけています。
同じ作品を何度かやって、参加者の反応の違いを楽しむこともできるけれど、私はガイドのレパートリーを増やしたい。東近美は展示替えも多く、そういうことができる美術館なので。
そうすれば、その日の参加者の好みにあわせ、ガイドの内容を途中で変えたりもできますから。



よくあります。あまりテーマをガチガチに作りこみすぎてしまうと、うまくいかないことが多い。



作品の知識を蓄えながらも、色々な角度から理解して、それをひとまず忘れて臨むということが大切です。参考図版などで二次資料を見せるより、とにかく目の前にある作品を見てもらいたい。

当館の所蔵品ガイドは、自分で作品とテーマを決め、ひとりでガイドするという特徴があります。



それが楽しいし、それが嬉しい。私たちに任せられているのでやりがいがある。



話を面白くすることに力を注ぐのではなく、できるだけ参加者を作品に近づけるように工夫しています。こちら側にひっぱるのではなく、背中をそっとおしてあげている感じです。

看視スタッフの声



所蔵品ガイドの案内放送が流れるとエントランスホールにお客様が集まってきます。そして、開始を待つ間、ガイドさんがお客様に声をかけている姿をよく目にします。初めての参加で緊張した面持ちのお客様もガイドさんの心遣いでいつの間にかこやかな雰囲気包まれます。帰り際、お客様から「今日のガイドはとても面白かったよ」と感想をいただくこともしばしば。そんな笑顔で帰って行くお客様を見送るのが私たちの日課です。

子どもとみる

子ども対象のガイドも担当する4名のガイドスタッフに語ってもらいました。



Aさん



Sさん



Tさん



Yさん

子どもの受入は、所蔵品ガイド開始後すぐに始まりました(2003年夏)。子ども対応を始めた動機や、続けている動機は？



子どもは美術なんてわからないんじゃないかなと誤解していた。子どものものの見方、考え方に感動し、意識が全く変わりました。子どもから得るものが多いですね。

大人とは違う？



大人は知識や既定概念で作品を見たり、理解しようとするけれど、子どもは目の前の作品だけを見る。



子どもがとにかく好きなので、子どもの対応をする機会があれば携わりたいと思っていました。ガイドスタッフとして活動する前から、地元の図書館で絵本の読み聞かせをしており、絵本と作品という違いがあるかもしれないけれど、「子どもには絵を見る力」があることを知っていました。子どもの発言はいつも鋭く、ドキッとさせられるし、面白い。子どもはストーリーを作るのが上手ですよ。時には発言がそのままストーリーになっていますよね。



私は子どもの頃から美術館や作品に触れる機会があり、それが大切だと感じていたので、子どもたちにもその機会を与えてあげたいと思っていました。先輩のガイドスタッフの子どもへのアプローチを見て、作品へのアプローチには枠がないことを知り、自分も色々な角度から子どもたちに作品を見せてあげたいと思っています。子どもの発言はいつも新鮮で、子どもたちに導かれてやっている感じです。



ガイドスタッフになった動機が、子どものガイドをしたいと思っていたからなんです。子どもは、見えたものから本質的なものをズバリあてることがあり、ときどき驚かされます。なぜ自分は、子どもが見ているように見えないのか。その経験が面白くて、子どもと一緒に見ることを続けています。

子どもたちにスクールプログラムを楽しんでもらうために、心がけていることは？



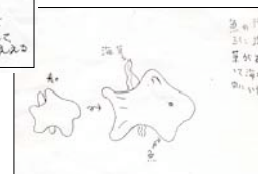
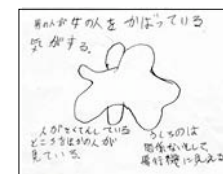
リラックスしてもらえる雰囲気作り。



子どもと同じ目線にたつこと。

註1 「ワーク」

ワークシート等を使った作業やアクティビティを「ワーク」と言っている。作品内容や子どもの学齢にあったワークを、ガイドスタッフ自身が考案することが多い。例えば抽象彫刻を〇〇に見えると小さな紙に書くワークを行うことで、発言の糸口につなげるなど。



こんな意見がありました(小学4、5年生)

「ダンスしているみたい」
「男の人が女の人を支えている」
「アルファベットのKとか、漢字の大」
「人が棒をもってるみたい」
「ヒトデ、星型みたい」

ハンス・アルプ《地中海群像》1941/65年



発言のない子どもにもアイコンタクトでコミュニケーションをとること。



余裕を持つことも大切。トーカーに余裕がないとうまく舵が取れないし、子どもたちの声を拾うことができない。

具体的に工夫していることは？



スクールプログラムでは、3作品のギャラリートークをしますが、メリハリをつけるために、1作品は「ワーク」(註1)を取り入れたトークにすることがあります。



私は、「もしもゲーム」(註2)という、もし作品の中に入ったらどんな匂いがして、どんな音が聞こえるのか、みんなで想像してもらってワークをすることがあります。



作品のポーズを真似る(註3)こともあります。そうすることで、より作品を観察するんですね。



「サウンドマップ」(註4)といって、作品からどんな音が聞こえるのかなど、吹き出しの紙に書いてもらうこともあります。音というテーマをたてることで、大人が気付かないような細かいところまで見てくれます。



「ミッション形式」(註5)は心をつかみやすい。みんなが同じ目的にむかっていくというスタイルなので。



作品のタイトルを考えてもらうこともある。言葉にすることで、より記憶にのこることもある。



言葉にすることって大切ですね。目標は見て、感じて、話すことなんだけど、その手段としてタイトルや台詞を考えてもらったり。いずれも、ゲームだけに走っては本末転倒。



美術館に来た意味がなくなるものね。

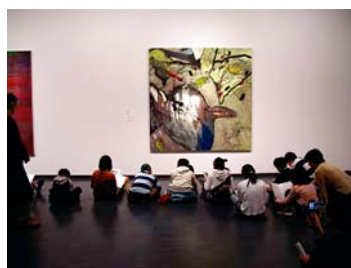


作品をよく見るための導入としてワークなどの展開をしている。
鑑賞教材の「アートカード」(註6)は良いツールですね。スクールプログラム前にアートカードを使用してもらって、美術館に来た時に、実物とくらべて「大きい！」とか「色が違う！」とか複製とは違うということを感じてもらえる。

註2 「もしもゲーム」

「もしも、あなたがこの絵の中に入ったら～」という「もしも」をキーワードに、絵の世界に入ったつもりで情景を想像し、言葉にしていくゲームで、ガイドスタッフが考案した。

うすぐらく、
足場が少ないところ
(小学5年生)



野見山暁治《口うるさい風景》1999年

目が見られない
ような砂あらし
(小学5年生)

「もしも、この絵の中に
風がふいていたら、どんな風だと思う？」

当館の子どもガイドの特色はなんだと思いますか？



大人のガイドと子どものガイドの担当者を分けることなく、どちらも対応すること。



教育普及研究員が学校と事前に綿密な打ち合わせをした結果をガイドスタッフに伝えてくれていることが良い。来館の目的に合わせて、ガイドスタッフが作品を選んだり、ガイドを組み立てられるのは、大変勉強になる。そして、振り返りの時間となる「反省会」では、他のガイドスタッフの工夫を知ることができて互いに刺激にもなり、まだまだ工夫の余地があることがわかり、面白い。



子どもガイドの時は特に入念に準備をするんです。子どもは大人が考えてもいなかった突拍子もないことを言う。色々な意見も拾いたいし、否定もしたくない。また、子どもに間違えたことを言うてはいけないという責任感もある。いつも真剣です。



だから子どもガイドはいつもドキドキします。



註3 作品のポーズを真似る

安井曾太郎《金蓉》の人物像のポーズを真似ている様子(中学3年生)。
真似てみると、実際には無理のあるポーズであることから、作家が大胆に構図を工夫したことがわかる。



註4 「サウンドマップ」

小林古径《加賀鷹》から音を想像する様子。
人間の声、火の音、いろいろと聞こえてくる。

註5 「ミッション形式」

ギャラリートークの中で、指令(ミッション)を与え、謎をときながら作品を鑑賞していく方法で、ガイドスタッフが考案した。
例えば、「絵の中に使われている色を探し出せ!」「気になる形を描いてみよ!」「絵の中のイメージをさぐれ!」などのミッションを出すことで、作品の中の色彩や形態に注目させる。

註6 「アートカード」

遊びながら鑑賞の基本を身につけられる貸出用教材。
国立美術館5館の所蔵作品のカードが65枚セットされており、「にたものつながりゲーム」や「名探偵ゲーム」などが楽しめる。

